

## 川越街道ウオーク【I】JR板橋駅から東武練馬駅まで

歩行距離 約10.7km。

集合場所 JR埼京線 板橋駅東口(滝野川口)改札口

集合時間 午前9時45分

JR埼京線板橋駅東口を出ると目の前の信号の先に「**近藤勇墓所**」の看板がある。墓所には近藤勇と土方歳三、104名の隊士の供養塔、慶応四年(1868)、処刑後に作られた近藤勇の墓、そして供養塔を建てた永倉新八の墓がある。

墓所から中山道に出て横断歩道を渡った路地の角辺りに中山道「**平尾一里塚**」があった。また、付近に板橋刑場(馬捨場)があった。

中山道を進み、板橋郵便局前信号で国道17号線を渡る。渡った左、17号線と右斜めに入る中山道の間が「**平尾追分**」。渡ったガストの右の道を進むと右側に薄茶の塀に囲まれた「**東光寺**」がある。

**東光寺**は浄土宗。丹船山薬王樹院東光寺という。縁起:創建年次は不明ですが、寺伝によると延徳3年(1491)に入寂した天誉和尚が開山したといわれている。当初は、船山(現・板橋3-42)あたりにあったが、前田家下屋敷開設(延宝7年 1679)のため現在地に移転。当時は境内も広く中山道に面した参道に沿って町屋が並び賑やかであったようだ。しかし、明治初期の大火や関東大震災による火災、第二次世界大戦による火災と、度重なる火災と区画整理のため縮小された。

境内には、昭和58年度、板橋区の有形文化財に指定された**寛文二年(1662)の庚申塔**、平成7年度板橋区の有形文化財に登録された**石地藏菩薩坐像**、明治になって子孫が供養の為に建立した**宇喜多秀家の墓**などがある。〔板橋区教育委員会掲示より〕

### 宇喜多秀家の墓

関ヶ原の戦いの後、一時は島津家に庇護されていたが、徳川家康に引き渡され久能山に幽閉され、慶長11年(1606)八丈島へ流人として配流される。十年後秀家は刑を解かれるがそのまま八丈島に残り、八丈島で50年を過ごした明暦元年(1655)11月に享年84歳で没した。豊臣家五大老の一人・中納言宇喜多秀家の墓は、没した八丈島にあるが、この東光寺と石川県金沢市の大蓮寺にある。

八丈島の宇喜多家は長男から2家、次男から5家が分かれ、加賀前田家の援助を受けながら島で存続した。徳川幕府が滅び明治2年(1869)、八丈島の宇喜多一族の赦免の布令が発せられ、明治3年に一族は前田家の船で東京に向かい、前田家の板橋の下屋敷に住宅を与えられて住んだ。明治6年、明治政府は宇喜多家に板橋の宅地を与えた。秀家の墓は当初この宅地内に子孫が建立したもので、中には秀家の遺品が収められていると伝えられている。のちに区画整理や戦災の影響で東光寺に移された。

### 寛文二年の庚申塔

東光寺の山門を入った左に多数の石塔が並んでいる。左から2番目の庚申塔。寛文二年唐破風笠付角柱で2m近く(区内最大)ある大きな庚申塔。塔には、日像・月像・二童子・四夜叉・一猿・一鶏・二鬼が刻まれていて、全国的にも最も優れた庚申塔の一つとされている。

### 石地藏菩薩坐像

石塔列の一番右。元は平尾追分にあったのが、明治になって東光寺に移転した。享保四年(1719)造立の高さ3mもある、区内最大級の石造物。下の台の正面に『六道利生』と、周りには薄い文字で多数の名前が刻まれている。

17号線に戻り平尾追分から国道を進み、次の信号で左折するのが川越街道なのだが、追分から右めの中山道(不動通り)に行く。100m強右側に「**観明寺**」がある。

**観明寺**は、宗派真言宗豊山派、山号は如意山。本尊は聖観音菩薩。脇本尊は不動明王。創建年代は暦応元年(1338)と伝えられているが不明。江戸時代、板橋宿の寺として多くの人の信仰を集めた。明治六年、成田山新勝寺から不動尊の分身を勧請した。現在も出世不動と呼ばれ親しまれている。不動通りの名はこのお不動様に由来する。

境内には、寺号標柱の後ろに「**青面金剛庚申塔**」、参道に加賀前田家下屋敷通用門を移築した山門、左側に同じく移築された下屋敷内三稲荷の一つの「**豊川出世稲荷神社**」、正面に不動堂と連結された本堂がある。稲荷神社に左基五郎作の龍の彫刻があるらしいが判らない。

#### **青面金剛庚申塔**

寛文元年に造立されたもので、青面金剛が彫られたものとしては、都内最古。(東光寺の庚申塔は寛文二年造立)

観明寺を出、中山道を横切り前の細い道を通って17号線に出て右折(日本橋から10km表示)。次の信号(板橋二)を渡り、17号線から左前方への四ツ又通りを進む。直ぐに高速道路の下の広場に入り進むと四ツ又信号交差点の手前左側に「**四ツ又馬頭観音**」がある。

#### **四ツ又馬頭観音**

当観音は、板橋区登録有形文化財で、享保十九年(1734)十月十九日に造られ、当初より四ツ又にありましたが近世以降に板橋区板橋二丁目五八番の地に安置されました。ここは、江戸時代に中山道の宿場町であった板橋宿平尾から分岐した川越街道と、板橋宿中宿と池袋方面へと伸びる高田道が交差する地点にあたります。四ツ又は交通の要衝であり、この馬頭観音も道しるべとして知られていました。(中略)

この石造を建てたのは、六十六部とあり、そのあと何文字かは判読できませんが、願主順貞と続きます。おそらく順貞はこの地に関係した人と考えられます。(中略)

四ツ又馬頭観音は、安山岩製で、高さ65cmほどです。

(板橋区教育委員会掲示)

四ツ又交差点を過ぎ、大山東町交差点で山手通りを渡り商店街を直進する。左に大山駅がある東武東上線の踏切を渡るとアーケードが続くハッピーロード大山という商店街になる。アーケードは約560m程続く。国道254号線との合流交差点(大山西町)を右に入った50m程先左側に「**大山福地藏尊**」がある。

#### **大山福地藏尊**

今より百五十年前文化文政の頃に鎌倉街道(日大交差点付近)にいづれからか「おふくさん」という行者来りて街道筋の人々の難病苦業を癒し大山宿の住民から大変に慕われておりました。

ついに大山に住み余生を衆生につくしましたので、後に地元大山の人々により「おふく地蔵」としてまつられ現在に至っています。(大山福地藏尊奉賛会掲示)

お堂の前に「お身洗地蔵尊」が祀られている。

国道254五泉に戻り右折。次の「**日大病院入口**」交差点で斜め右に入る道(下頭橋通り)が旧川越街道でここが「**上板橋宿**」の入口だが、**轡(くつわ)神社**に寄るために右折する。150m程進んだ信号交差点

の右角に「青面金剛庚申塔」がある。次の信号交差点の先左側に「轡神社」がある。

### 轡(くつわ)神社

御祭神 倭建命(やまとたけるのみこと)

もと轡権現社と呼ばれていた。名称の由来については、この地を訪れた徳川家康の乗馬のくつわを祀ったからとも、また馬蹄を祀ったからともいわれている。江戸時代から「百日ぜき」に靈験がある神として広く信仰を集め、遠方から参拝に来る信者で賑わったという。信者は病気の治療を祈るとともに、当社に奉納されている馬わらじの片方と麻をいただいて帰り、全快すると新しい馬わらじと麻を当社に奉納した。

社殿前の道路は、俗に鎌倉街道といわれた古道で、この道が石神井川を渡るところが本来の「板橋」という説もある。(板橋区教育委員会掲示)

轡神社そばの信号交差点を右折、道は旧川越街道(下頭橋通り)に突き当たるので右折。左角に井戸ポンプがある「防災辻広場」がある。右折して50m程、右の「弥生郵便局」の先隣にピンク色の建物の「辰屋かぎや」という和菓子工房がある。ネットで調べると辰屋かぎやは、初代が200年程前に京で和菓子の修行をし、板橋で「鍵屋」を開業。明治27年の板橋の大火で廃業、分家4代目の栗原登喜雄が辰年生まれに因み「辰屋」を号して「かぎや」を復活したという。隣の豊敬(とようけ)稲荷神社の境内にある「旧板橋宿概要図」にも「かぎやの屋号 栗原家」がある。

2 軒先右に「豊敬(とようけ)稲荷神社」がある。境内左手に「旧板橋宿概要図」と「豊敬稲荷神社玉垣建築記念」の碑が建っている。

### 豊敬(とようけ)稲荷神社

祭神は宇迦魂大神・猿田彦神・大宮賣神。創建年代は不詳ながら、江戸末期から明治初期に市神様として祀られたものと思われる。

### 旧板橋宿概要図には

川越街道は、江戸時代に川越道中・川越往還とも称し、川越と江戸を結ぶ幹線でした。また、中山道の脇往還としても利用され、信州や越後へも通じていました。この弥生町の旧道沿いは、宿(上板橋宿)と呼ばれ、川越口(下頭橋)から上・中・下の三宿に分かれ、文政六年(1823)の「上板橋村地誌改書上帳」には、宿内は「六丁四拾間」(約730m)道巾は三間(約5.5m)と記載されています。宿の中程には名主屋敷と称する建物があって、昭和の初めごろまで遺っていたようです。名主の河原与右衛門家は明治期には移転してしまいましたが、明治期に副戸長を務めた榎本家には「上板橋宿副戸長」と刻まれた石碑が現存しています。

上板橋村は、町場(宿)と村方に分かれ、その村方の範囲には現在の板橋区の南西部地域と練馬区の小竹・江古田も含まれ、その地域からは人馬が提供され旅客た物資の継立を担っていました。

(板橋区教育委員会掲示)

神社の右前の細い道を入った先に「萬福寺」があり、その隣に「弥生公園」があり、ベンチ、トイレがある。街道に戻り3・40m進んだ信号交差点の右手前角の古めかしい板壁の家が「説教強盗」で知られる「三春屋」である。

### 説教強盗

大正末期から昭和の初めにかけて、東京府(現・東京都)で奇妙な説教強盗が出没した。夜間に

侵入して「金に迫られ、夜間お寒いところに参上した次第です。寝ているところを基だすみませんが、少々金を恵んでいただけませんか」といい、刃物で脅しつつ居座り、「家が暗いから明るくした方が良く、戸締りを厳重にした方が良く、番犬を買いなさいとか防犯心得や対策提案を数時間にわたって静かに家人に説いてから去ったという。番犬を買う人が増え(そのため、犬の値段が急騰したとのこと)、「猛犬注意」の張り紙が増えたのも彼の提案だそうで、ここ三春屋でも彼の説教を受けたが、現場にあった指紋から左官・妻木松吉が逮捕された。という事件。

交差点の左先角の竹作りの旧家のような玄関構えの「飯島(飯島鳶工業)」の玄関先に「板橋」の柱、窓の右横に日本橋からの里程標「距 日本橋二里二十五町三十三間」が立てかけられている。

上板橋宿を進み、中板橋駅入口信号から下りながら左から右にカーブすると石神井川に架かる「下頭橋」が見えてくる。橋の手前右側に「下頭橋六蔵尊」が祀られている祠があり、境内には「他力善根供養」の石碑がある。また、「下頭橋」の解説板がある。

### 下頭橋

弥生町には江戸時代の川越街道が通っています。そのうち、大山町の境から当地までの街道沿い上板橋宿となっていました。石神井川に架かる下頭橋は、寛政十年(1798)近隣の村々の協力を得ることで石橋に架け替えられています。境内にある「他力善根供養」の石碑はその時に建てられたものです。

橋の名の由来については諸説あります。一つ目は、旅僧が地面に突き刺した榎の杖が、やがて芽吹き大木に成長したという「逆榎」がこの地にあったという説。川越街道を利用する川越城主が江戸に出府の際に、江戸屋敷の家臣がここまで来て出迎え頭を下げたからという説。三つ目は、橋のたもとで旅人から喜捨を受けていた六蔵の金をもとに石橋が建て替えられたからという説の三つが伝わっている。ここにある六蔵祠は六蔵の遺徳を讃えて建てられたものです。(後略)

(板橋区教育委員会掲示)

下頭橋は始めは丸木2・3本を並べた程度の橋で、出水時には事故が頻発し危険な場所であったが、寛政年間(1789～90)頃、ここに石橋が架けられた。それには、乞食六蔵伝説がある。

### 乞食六蔵伝説

寛政の頃、石神井川の架かる丸木橋のたもとに、名前も生国も不明な年老いた乞食が住み着き、終日土下座して旅人から喜捨を受けていた。彼は土地の人から六蔵と呼ばれ親しまれていたが、やがて亡くなり、旅僧によって手厚く葬られた。ところが、埋葬に際し、死者の懐中から永年貰いためた大金が現れたので、僧はこの金を使って丸木橋を石橋に架け替え、旅人の便をはかった。

村人たちは、永年頭を下げていたその老乞食六蔵の徳をたたえ、橋の名を下頭橋と命名し、橋のたもとに祠堂を建て、六蔵を菩薩とあがめてその霊をまつた。

下頭橋は、明治三十七年(1904)の道路改修の時に木橋となり、大正十三年(1924)頃再び石橋となったが、昭和三年に鉄筋コンクリート造りとなった。

下頭橋を渡り、街道は斜め左に入り、国道254号線と環状7号線の「板橋中央陸橋」交差点に出る。交差点の向こうに「長命寺」が見え、交差点を渡り「長命寺」に寄る。

## 長命寺

東光山医王院長命寺 宗派 真言宗豊山派 本尊 薬師如来立像。

「新編武蔵風土記稿」に「開山、長栄、寛文十年(1670)十一月二十四日寂す」とあり、伝存する過去帳も承応元年(1652)から書き始められていることから、当寺は江戸時代の前期にはすでに創建されていたと考えられます。江戸時代には、天祖神社(南常盤台二丁目)や氷川神社(東新町二丁目)をはじめ付近の神社の別当(管理者)でもありました。

明治時代には、豊島八十八霊場の二十一番札所にもなり、また板橋七福神の一つ福祿寿も祀られています。

当寺周辺には、室町時代「お東山」にあったといわれる**板橋城跡**の伝承地の一つでもあります。

平成十一年三月 (板橋区教育委員会掲示)

長命寺の裏にある区立上板橋小学校の校内に「伝 御東山板橋城(おひがしやまいたばしじょう)跡」の石碑と解説版がある。

### 伝 御東山板橋城跡

長命寺やこの上板橋小学校がのっている丘陵一帯を「御東山(おひがしやま)」と称していたことがありました。十二世紀初頭ころから、この辺りは豊島氏が支配しておりました。そのなかで、因幡守親盛(いなばのかみちかもり)という人が御東山というところに在城して、姓を板橋と改めたと江戸時代に編纂された「新編武蔵風土記稿」には記され、ここを板橋城としています。同書では城跡は不詳としていますが、豊島氏の後、この地を継いだ北条氏の家臣のなかに、大谷口、毛呂(茂呂)、台(台宿か)など御東山に近い板橋姓の住人が記され、また地形をみてもここに城(砦)があったことが充分考えられます。(後略)

平成十八年(2006年)

上板橋小学校創立百三十周年記念

上板橋小学校まてば椎会

長命寺から国道254号線を進む。直ぐ先、左手のローソンストアー100の先に「R254 本郷から9km 日本橋から12.2km」の道標がある。国道254号線を右に渡り進む。1km程の上板橋一丁目バス停の先で街道は国道から分かれ斜め右に入り、「上板橋南口銀座」商店街を進む。商店街入口から約300mの左に「コモディイイダ」のある信号交差点は、右折すると東武東上線板橋駅、左折すると国道254号線にある「五本ケヤキ」から城北中央公園へ行く。左折して国道の分離帯にある「五本ケヤキ」へ向かう。

### 五本ケヤキ

(前略)新設された新川越街道(現・国道254号線)は、当初、旧川越街道と区別することもあって改正道路と称していた時期があった。

さて、五本ケヤキは元上板橋村村長・飯島弥十郎家の屋敷林の一部であった。道路用地となったため、切り倒される予定であったが、同家の強い要望もあって工事はこの木を避け、昭和十三年～十四年にかけて完成した。(後略) (板橋区教育委員会掲示)

国道を渡り直進し次の信号を右折し150m程の左側に「都立城北中央公園」がある。中に入り150m程行くとトイレ、その先に**あずまや**がある。

## 都立城北中央公園

板橋区と練馬区にまたがり、南側は石神井川、北側は田柄川に挟まれた台地上にある。野球場軟式2面、ソフトボール場2面、テニスコート9面、陸上競技場、広場数か所ある広大な公園。旧石器時代の遺跡「茂呂(もろ)遺跡」、旧石器時代から平安時代にわたる「栗原遺跡」がある。

### 茂呂遺跡

通称“オセド”と呼ばれるこの独立丘陵は、以前から縄文時代早期の土器破片の散布地として知られていました。

昭和26年(1951)3月、ここを通りかかった一中学生が、この栗原新道の切通し断面の関東ローム層(赤土)中より、黒曜石製の石器と礫群の露出を見つけました。

この発見がもとで、同年7月明治大学と武蔵野郷土館が共同で、関東ローム層中に残された旧石器文化(先土器文化・岩宿文化とも呼ばれています)の発掘調査を行いました。その結果「茂呂型ナイフ」と呼ばれる特徴的な石器の存在が明らかになり、日本の旧石器文化研究の端緒となった岩宿遺跡(群馬県)とならび考古学研究史上特筆される成果が得られました。

昭和44年(1969)、この丘陵の一部は都の史跡(考古)にしていされ、さらに昭和60年(1985)には板橋区登録記念物に認定されました。

平成7年(1995)2月 板橋区教育委員会

### 栗原遺跡

栗原遺跡は旧石器・縄文・弥生・奈良・平安の遺構・遺物を出土した複合遺跡です。

#### 練馬区登録史跡 栗原遺跡の竪穴住居跡

栗原遺跡は、昭和30年(1955)に立教学院総合運動場造成の際、発掘された遺跡で、このあたりの旧小字名「栗原」を遺跡名としたものです。

昭和30年から翌年にかけて、立教大学を中心に、地域の学校の協力を得て、発掘調査が行われました。弥生時代の住居跡が三軒、古墳時代から平安時代の住居跡が十五軒見つかりました。他に、旧石器時代の石器や縄文時代の土器や石器が出土しています。このあたりは、石神井川と田柄川に挟まれた台地であり、日当たりもよく、生活に欠かせない水の得やすい土地であったため、長い間、人々が生活していました。

復元された住居跡は、八世紀初め頃(奈良時代初め)のもので、昭和三十二年(1957)東京大学教授 藤島亥次郎博士の設計により建てられたものです。発掘された竪穴住居跡は、地表から床面まで約50cmの深さに掘られ、北側に粘土でかまどがつくられていました。柱穴は四箇所あり、復元の際には、径約21cmのケヤキの丸太を支柱にし、梁・桁にスギ丸太を用い、カヤを葺いて復元しています。

この復元住居跡は、奈良の都の華やかさにくらべ、当時の地方農民の暮らしぶりがどんなものであったかを語りかけてくれます。現在は東京都が管理しています。

平成二十九年三月 練馬区教育委員会

街道に戻り、上板橋駅入口の信号を左折、30m程の左側に「子育て地藏尊」がある。

### 子育て地藏尊の由来

当地に安置されている地藏は、通称「子育て地藏」と呼ばれ、人びとに広く親しまれています。お

堂の中にある二体の地蔵は、もともと栗原堰の一本橋(現在の桜川一丁目5番地)付近に建てたものといわれていますが、それを裏付けるように、石仏の台座や本体には貞享五年(1688)や安政六年(1777)といった造立された年号や、上板橋村栗原を中心とした奉納者の名前が刻まれています。

明治初年に、これらの地蔵は、川越街道に面した「ガツカラ坂」と呼ばれる当地に移った」といわれています。大正三年川越街道と東上鉄道(現在の東上線)の上板橋駅を結ぶ道(現在の上板橋南口銀座)が通じた時には、両道が交差した角地に据えられていましたが、この時すでに地蔵は倒され、放置された状態であったといわれています。また、移転した当初は三体あった地蔵も、いつしか二体となっていたといえます。

その当時、宝田豆腐店主であった宝田半二郎氏は、地蔵が荒れ果てた状況にあったことを憂慮し、大正十二年頃に店舗に隣接した現在の場所へと地蔵を移しました。さらに昭和十年頃になると、半二郎の子息である宝田源蔵氏と七軒家の木下仙太郎氏が中心となって、地蔵をお祀りする地蔵講を結成しました。議員も三百人をかぞえたといわれています。

都市化がすすんだ現在も、子育て地蔵は、人びとの素朴な願いを引き受ける仏様として、商店街を中心に大切に守られ、お祀りされています。また、四月から九月にかけての七の付く日には、地蔵堂の前の旧川越街道で縁日が開かれるなど、地域の活性化にも一役かっています。

平成十九年七月七日 上板橋子育て地蔵講

次の信号交差点で上板橋南口銀座は終わります。信号の先右側にケヤキの屋敷林を持つ大邸宅がある。その先200m程の変則五差路で練馬区に入り、北一商店街で下練馬宿の入口である。五差路の左に入る道の入口に「庚申塔」がある。50m程の左側の米屋野瀬商店の脇に「川越街道 下練馬宿」解説板がある。

下練馬宿は、江戸寄りから下宿、中宿、上宿と分かれ、本陣は中宿の木下家(後に上宿の大木家に交代する)が務めた。

### 川越街道 下練馬宿

中山道の脇往還である川越街道は板橋宿から分かれ、江戸城から川越城を結ぶ道として整備されました。

この北町は、練馬区唯一の宿場町として栄え、現在も商店街として続いています。この辺りは下宿と呼ばれ、鍛冶屋、紺屋(こや染物)などがあり、江戸時代鷹狩りの餌となる「けら(昆虫)」を扱う「けらや」もありました。

板橋区との境には、王子、戸田道標となる馬頭観音の祠が道路の中央にあります。環状八号線の上には「従是大山道」と刻まれた道標があり、富士・大山道が分岐しています。富士・大山詣をする人たちが賑わいを見せていたこともうかがい知る事ができます。

旧川越街道の歴史を活かしたまちなみ協定 北町旧跡研究会

王子・戸田への道標の馬頭観音祠は野瀬商店から100m程のツルハドラッグの角を右に入った交差点の道の真ん中に「三又の馬頭観音」として建っている。

150m程進んだ左手の内田屋呉服店の左脇に、先ほどの野瀬商店のと同じ川越街道下練馬宿の解

説板と同じものがある。そこから100m程で街道は環八道路の陸橋で横切る。この場所は旧川越街道と大山道の分岐点であった。その陸橋の上に「下練馬宿の大山道道標」と「東高野山道標」が覆屋の中にある。下練馬宿の大山道道標は、高さ約1.5mの石造物で、正面に「従是大山道」と願主名が刻まれ、右面には講名「武蔵豊嶋郡下練馬村 講中四拾八人」、左側面には「宝暦三年癸酉八月」の年記と共に、「ふじ山道 田なしへ三里 府中江五里」と刻されている。

#### 下練馬宿の大山道道標（平成五年 練馬区指定文化財）

旧川越街道とふじ大山道の分岐点に宝暦三年（1753）八月、下練馬村講中によって建てられた道標です。上部の不動明王像は後に製作されたものです。

江戸時代に盛んであった富士・大山信仰に関する資料として貴重なものです。

#### 東高野山道標

「左 東高野山道」と刻まれた角柱は、高野台三丁目の長命寺への道しるべです。長命寺は紀伊の高野山を模して伽藍を整え、山号を東高野山と称しています。

この二つの道標は、環状八号線の工事により元の位置から八メートルほど西に移動し、現在の場所に設置されたものです。

移転前は、さばみ野大山への道しるべとして、また東高野山への道しるべとして江戸方面から来る人々のため、東南東の向きに置かれていました。現在は見学しやすいように向きを変えています。

平成二十年 六月 練馬区教育委員会

環八を渡り、商店街に入る。入ったところの右側が**脇本陣内田家跡**で、その先スーパーユータカラヤが**本陣木下家跡**、その向かいが**問屋場跡**である。練馬北町郵便局の2・30m先を左折し**三叉路**（逆Y字路）を右に行ったところに「**阿弥陀堂**」がある。境内一番奥左手に「**千川家の墓所**」がある。また、指定登録文化財の「**半鐘**」がお堂の軒に釣られている。

#### 阿弥陀堂と千川家墓所

この阿弥陀堂は、「新編武蔵風土記稿」に「阿弥陀堂二（ふたつ）一ハ金乗院持、一ハ清性寺持ニテ弥陀ハ春日ノ作ナリ」とあるうちの後者にあたります。清性寺は明治に廃寺となり、金乗院と合併しました。本堂の半鐘は天保十四年（1843）のもので、銘文に「神明山清性寺持阿弥陀堂」と記されています。

墓地には千川家累代の墓があります。千川家は千川上水開設の功労者として知られています。千川上水は元禄九年（1696）、江戸下町方面の飲料水として玉川上水から分水された水道で、工事には徳兵衛・太兵衛の二人があたりました。私費を投じて工事を完成させた功績により、両人は幕府から苗字帯刀を許され、千川家の姓を賜りました。

開通から十年程度の宝永四年（1707）、上水は付近二十か村の農民の願いで、灌漑用水として利用できるようになりました。両人の子孫は代々下練馬村（現在の北町）に住み、千川上水の取締役として維持管理に努めました。

この墓所には初代徳兵衛から数えて三代目の源蔵以下四台善蔵、五代仙輔、六代民蔵、七代右保などの墓が建っています。

練馬区登録文化財

○千川家の墓

## ○阿弥陀堂の半鐘

昭和二十八年三月

練馬区教育委員会

### 阿弥陀堂の半鐘

天保十四年(1843)江戸の鋳物師(いもじ)粉川市正(こかわいちのかみ)作による銅製の半鐘です。高さ59.0cm、口径33.5cmです。形状は竜頭(りゅうず)は2頭の龍を背中合わせ付け、中央部に火炎に包まれた宝珠を配しています。乳の間に4列4段の乳を施し、撞座(つきざ)には竜頭と同じ向きで鐘身の下の方に複弁八葉(ふくべんはちよう)の蓮華文を施し、下帯には唐草文をめぐらせています。池の間の第一区、第二区、第三区、第四区に、年代、作者、関係者の戒名を陰刻しています。

かつて北町二丁目にあり廃寺となった清性寺が阿弥陀堂を管理していたことや旧下練馬村の人々の名などが刻まれ、地域の歴史を伝える資料です。現在は阿弥陀堂の東南隅の軒に釣られています。

平成27年度区登録

練馬区 HPより

三叉路(逆Y字路)を左に行った先に小学校の北側、田柄川緑道に寛永通宝を模し、江戸開府400年を記念して建てられた「徳川綱吉御殿跡」の碑がある。かつてこの辺りは「御殿」と小字で呼ばれていた土地で、徳川綱吉鷹狩り御殿が建てられていた。

### 徳川綱吉御殿跡之碑

この付近一帯はかつて「御殿」と呼ばれた土地であった。後に江戸幕府第5代将軍となる徳川綱吉が寛文年間(17世紀後半)のこの地を鷹場とし、宿泊所として「鷹狩御殿」を建てたことに由来する。

江戸幕府四百年を記念して之を建つ

平成15年(2003)11月吉日 練馬区

街道に戻り進むと、すぐ右側に「浅間神社」があり、境内の本殿左横に標高37.76mの「富士塚」があり、浅間神社の裏手に清性寺御堂と白狐稲荷がある。

### 浅間神社

御祭神 木之花開耶姫命

境内社 天祖神社 大日要貴命

神明社 大日要貴命

當社は、明治先代に上駅(?)地に築かれたと伝えられ、徳川五代将軍綱吉の頃には時を揚げたの祭典もあり、又古く此の地は宿場街として大変な賑わいを見たところで、爾来富士浅間神社の靈山として厚く崇敬され今日に及んでいる。

なお、山は明治の前に第一回、明治五年六月に第二回の築造がなされ、街内の発展に伴い昭和二年六月第三回目の築造により現今の様態を呈するに至った。(境内案内板より)

境内入口に、「旧川越街道下練馬宿」の解説板がある。

### 旧川越街道下練馬宿

この道は、戦国時代の太田道灌が川越城と江戸城を築いたころ、二つの城を結ぶ重要な役割を果たす道でした。

江戸時代には中山道板橋宿平尾で分かれる脇往還として栄えました。日本橋から川越城下まで「栗(九里)より(四里)うまい十三里」とうたわれ、川越藩(いも)の宣伝にも一役かいました。

下練馬宿は「川越道中ノ馬次ニシテ、上板橋村へ二十六丁、下白子むらへ一里十丁、道幅五間、南へ折ルレバ相州大山へノ往来ナリ」とあります。川越寄りを上宿、江戸寄りを下宿、真ん中を中宿とよびました。

上宿の石観音の所で徳丸から吹上観音堂への道が分かれています。

通行の大名は川越藩主のみで、とまることはありませんが、本陣と脇本陣、馬継の間屋場などがありました。旅の商人や富士大山詣、秩父巡礼のための木賃宿もありました。

浅間神社の富士山、大山不動尊の道標、石観音の石造物に昔の面影を偲ぶことができます。

平成六年三月

練馬区教育委員会

### 下練馬の富士塚

江戸時代中ごろから昭和初めにかけて、江戸八百八講と言われるように、富士山や神奈川の大山に登拝に行く富士講や大山興などの山岳信仰者の集まりが練馬区内にもたくさんありました。

富士講は、霊峰富士に登り浅間神社参拝を目的に結成され、年ごとに講の代表者として参拝するものを選び、必要な経費を講員全員で負担していました。富士講がさかんになり、富士山に似せた富士塚が各地に築かれました。富士登拝すると、実際に富士山に出かけたのと同じ御利益があるとされていました。

下練馬の富士塚は、高さ約5m、径が約15mあります。下練馬上宿、中宿の丸吉講によって江戸時代に築かれたものと考えられます。明治5年(1872年)と昭和2年(1927)には修復工事を行いました。現在も町会の有志により、7月1日に山開きが行われています。

平成元年度区登録・平成5年度区指定

練馬区 HP より

浅間神社の裏手に「清性寺御堂と白狐稻荷神社」がある。

### 清性寺の縁起

清性寺は、江戸時代初期よりあり、「新編武蔵風土記稿」にも記されています。その内容は「今乗院末、下三ヶ寺並に同じ、神明山観音院と号す。本尊不動は弘法の作、長さ一尺二寸立像なり。法流開山快遍宝暦8年2月27日化す。」とあります。歴代の住職の墓石の名前を見ますと、かなり高僧であったことがわかり、権威の高さがうかがえます。境内には明治の初期までは、鐘楼もあったと言われ、寺の敷地はからり広大であったものと思われます。

清性寺の入り口にある「招魂碑」には千川上水の開拓者、千川家の名前を始め、多くの阿弥陀堂有力者の名前が刻まれている事が上げられ、阿弥陀堂との関係の深さを物語っています。又、清性寺と阿弥陀堂は一体であったものと判断できるものであります。この事をとらえ、双方の墓石などの年代を追いますと、清性寺には寛文2年(1662)の住職の墓があり最も古く、他にも寛文11年の尼さんの墓があり、330年以前の徳川時代初期から本寺が実在していたことが実証されるものであります。阿弥陀堂では寛文12年(1672)のものが最も古く、創成期の清性寺、阿弥陀堂、双方の往時の歴史の重さを感じられます。

又、現存する寛政4年の「下練馬絵図」を見ますと、本寺の規模を知ることができ、往時の賑わいを偲ぶことができるものであります。

本尊不動像は、弘法の作とあり製作年度は不明ですが、この度の火災により、全体が焦げ、手は無いものの現存致しており、又、ご本尊以外にも比較的大きな弘法大師像、木魚等があり、同じ年代の作と思われる。この様な古い仏像は、北町ではこれ以外に実存せず、我が街の宝として大切に保存、後世に残さなければなりません。(後略)合掌

平成8年5月吉日 清性寺管理委員会

### 白狐稲荷霊石の由来

白狐稲荷は白い狐が石に浮き出ている霊石で、徳丸の斎藤家から祭りこみを依頼されたものと言われております。

斎藤家の由来によれば、これは、豊臣秀吉公の守り神であったが、慶長5年、関ヶ原の戦いの際に、秀頼公から石田三成に渡したものだと言われ、戦いに敗れた石田三成は、越後に逃げ延びたが、大切なこの石を泊まった谷地に預けてしまったため、捕まって死罪になったと言われております。もしこの霊石を、離さず持っていれば難に遭わなかったのではないかとわれ、その後は、この宿の災難よけの稲荷となっていたものだそうであり、斎藤家はその子孫にあたります。(練馬の伝説より) 平成8年5月吉日 清性寺管理委員会

街道を120・30m進んだ右側に、「北町観音堂(石観音堂)」があり、堂には聖観音坐像が収められており、天和三年(1683)造立の「仁王像」や「馬頭観音」もある。

### 北町観音堂(石観音堂)

ここには、天和二年(1682)銘の「北町聖観音坐像」をはじめ馬頭観音や庚申塔など数多くの石造物あります。江戸周辺を探訪した小石川の僧が記した紀行文「遊歴雑記」にも、文化十二年(1815)にここを訪れた記述があり、往来の人々の信仰や赤塚村への分岐道ともなっていたことが分かります。

### 練馬区指定有形民俗文化財

#### 「北町聖観音座像」 平成八年二月指定

高さ二七〇センチメートル、区内最大の石仏。背には「武州河越多賀町隔夜浅草光岳宗智月参所 奉新造聖観音為四恩報謝也 峯(時)天和二年八月・・・」、台座には川越街道沿いの二十九の地名が刻まれています。

### 練馬区登録有形文化財

#### 「北町の仁王像」 平成十一年一月登録

向かって右、阿形像、左、吽形像。重厚な造りの像で、両像の背には「天和三年・・・奉立之施

主光岳宗智…」の銘があり、聖観音座像建立の翌年に建てられたことが分かります。

### 馬頭観音

高さ一三八センチメートル、頭上に馬頭を戴き、忿怒の相をしています。制作年は不詳ですが形態から江戸時代の造立と推測されます。

平成三十年(2018)三月 練馬区教育委員会

観音堂の右の道に入り、突き当りを左に行くと東武東上線の**東武練馬駅**の南口に着く。

今日はここまで。